



営農情報



第2号 24年7月号

「あまおう」7月の管理

平成24年7月5日発行
南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

～炭そ病に注意～

6月中旬以降、雨が多く、炭そ病が感染・拡大しやすい状況が続いています。また、今年は、子苗数の確保に時間がかかり、鉢上げが遅れる傾向にありますので、特に炭そ病への注意が必要です。炭そ病を防ぐため、定期的な薬剤防除の徹底や、感染株の早期発見（見回りを多く）・早期排除（怪しい株は排除）に努めて下さい。

また、ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに、物理性改良を主体にした土づくりを行い、8月中旬には定植床の準備が終わるように計画的な作業を心がけてください。

育苗管理

現在、さし苗はほぼ終了、すけポットは終わりかけで6月末～7月上旬が切り離しのピークになりそうです。病害虫では、特にうどんこ病の発生が目立つようです。また、カキノヒメヨコバイの発生が散見されていますので、定期的な薬剤防除をお願いします。

作型の考え方

下記作型を参考に、計画的な育苗を行ってください。

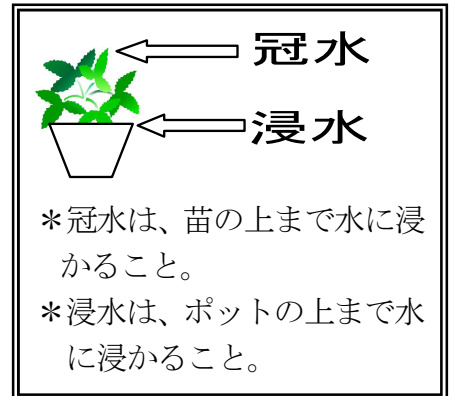
作型 (予冷庫利用)	入庫	出庫	定植日	陽光 処理	定植時の分化程度
株冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	3回	分化～ガク片形成
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	2回	分化～ガク片形成
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19～	1回	分化
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日		分化～ガク片形成
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日		分化
自宅株冷の2回目処理 (10日間程度処理)			9月19～22日		分化
普通ポット			9月20～25日		肥厚後期
普通ポット(厳寒期安定出荷)			9月26～28日		

- 鉢上げが遅れたり、根傷みなどで生育が遅れた（クラウン経8mm未満）場合や病害の発生がみられる（炭そ病、うどんこ病）場合は、無理に早い作型にせず、良い苗に仕上げることを優先してください。
- 自宅株冷の2回目処理（短期株冷）は、普通ポットよりも花芽分化が遅くなる可能性があります。

浸水・冠水対策

梅雨時期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策（溝の設置や排水ポンプの準備など）をしておきましょう。

- 基本的に、浸水・冠水する恐れがある場所で育苗しない。
- 冠水した苗は使用しない。
- 浸水した苗は水洗いした後、「炭そ病」の防除を行う。
- ポットは乾かし気味に管理する。
- 降雨後、急速に晴れ上がるような時は、寒冷紗で被覆し、葉かぎ作業は、根が回復してから行う。



肥培管理

充実した苗作りに向けて、過不足のない肥培管理を目標にしますが、「炭そ病」の危険性がある場合は、窒素過多にならない管理を徹底して下さい。

- 活着したら追肥（置き肥）を開始する。
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OK-F-1で1,500～2,000倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。
- 「炭そ病」発生確認後は、発病株・周辺株を除去し、追肥を控える。

【 施 用 例 】	6月下旬	⇒	7月中旬（追肥）
	IB化成で 1～2粒/鉢		夜冷・株冷Ⅲ型：液肥で調整 上記以外の作型：IB化成1粒/鉢追加

（注意）置肥の肥効は気象条件によって変わります。3寸ポットの株冷Ⅲ型・Ⅳ型・Ⅴ型の最終追肥（液肥のかん注）時期がそれぞれ8月7日・8月10日・8月15日であることを考慮して投入するようにしてください。

かん水

- 「あまおう」は湿害に弱い。過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間、濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は、葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、少量多回数かん水に心がける。

葉かぎ

- 葉かぎは、活着後、根が十分にまわってから開始する。
 - 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は、最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3.5枚を確保する。（ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。）
 - 生育不良時や降雨直前、雨天時の摘葉はしない。
 - 摘葉作業直後は「炭そ病」予防防除を必ず行う（傷口からの感染防止）。
 - **最終の摘葉時期**の目安は、株冷で入庫15～10日前、夜冷で処理開始直前、普通ポットで8月30日頃とする。
- ⇒苗の葉数が、株冷の入庫時に4～5枚、夜冷の処理開始時に3.5枚、普通ポットの定植時に6枚となるようにする。

病害虫防除等

農薬ごとの使用回数制限は、親株の切り離しからカウントされます。
ローテーション防除表を参照して、予防防除に心がけて下さい。

炭そ病

「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します

- 炭そ病は濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的な農薬散布（特に降雨前後）を徹底する（ローテーション防除表参照）。降雨が連続する場合も、雨の合間をみて農薬散布を行う。
- 枯死株が発生した場合はただちに除去し、その周辺1mの株も除去する。葉に病斑を確認した場合も同様に除去する。
- 排水溝等の整備など、育苗床の排水対策を十分に講じておく。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔を確保する）
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）
- 窒素過多は発生拡大を助長するので、過剰な追肥は控える。

うどんこ病

うどんこ病の症状がある葉を入庫または定植しないようにしましょう

- 病状の進展が早い梅雨期を中心に予防防除を行い、病斑の上位葉への進展を抑制する。
- うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。
(入庫時や定植時に病徴のある葉が除去できているようにする。)

疫病

- 梅雨時期～8、9月の高温多雨期に発生が多い。
- 7～8月に薬剤による予防防除を行う。

カキノヒメヨコバイ

- 1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 被害の多い7～8月に定期的な薬剤散布を行う。

ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。
- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。
- 低温処理開始までに必ず防除を行い、ハダニの発生の無い状態で入庫する。

コガネムシ類幼虫

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンSLゾル500倍のポットかん注を行っておく。

本田管理

収穫が終了したハウス土壌は、夏の期間にリフレッシュを行い、次年度に備えましょう。

● 有機物の施用	：前年度の栽培により消耗した土壌有機物の補給 ・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。
● 雨にあてる	：土壌中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出 ・土壌中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
● 土壌消毒	：土壌病害虫(ネグサレセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除 ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。 (土壌病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う) ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤・クロピクフロア等がある。 ・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！